

# OPEN ACCOUNT

(オープン アカウント)

アジア開発銀行福岡 NGO フォーラム ニュースレター  
Vol.6 Dec. 2000

## タイでのスタディーツアーに参加して

池田真里子

私は今年の8月21日から29日において、「メコン・ウォッチ」というNGO主催のスタディーツアーに参加しました。主な訪問先は、ADB（アジア開発銀行）や世界銀行、国際協力銀行（JBIC）の融資などでも問題視されているダム建設地や汚水処理プロジェクト地、水の経済価値の低い場所から高い地域に川の水を運ぶ導水計画地、またこれに対する住民の反対運動や地元NGOの活動などの現場です。そのなかで、特に印象深く、私の心に残っている感想をお話します。

旅の始まりは、サマッチャー・コンジョン（「貧民連合」）のデモサイト訪問からでした。貧民連合とは、タイの農民・漁民の問題を解決するために結成された全国レベルの住民組織で、現在バクムン・ダムの影響住民を中心としたグループが、保証金・水門の開放・魚の確保を求めて、1999年3月より座り込み運動を続けています。現在8つの抗議村（反対住民が抗議のために集まってできた集合地。正確には第7村がダム内に残り今は人がいないため、7つ）があり、第1～第7村は、ダムの周辺を占拠しています。しかし抗議村よりいくらかバンコクの首相に抗議文を出しても何の反応もないため、「政府に直接会いに行こう」と、首相府の前に集結したのが第8村です。第8村では、今年の7月流血事件が、8月には住民が首相府内に乗り込み、225人の逮捕者が出てしまいました。しかしそうした事件により、政府はやっと重い腰を上げ、「中立委員会を作って、一連の問題を審議する」と住民に約束をしました。写真はそこを訪れたときの様子です。

本当に“首相府前”の道路沿いで、住民たちは反対の意思を露わに表現していました。彼らは家がないわけではありません。これは生業を奪い取られた人々が、自分たちの生活のために闘っている様子です。（私が訪れたときは大騒動の後で、静けさを取り戻していましたが）数にして第8村では約2000人がこの座り込み運動に参加し、各ダム周辺でも一声かければ200～300人の人々がいつでも集まってきます。説明してくれた貧民連合のバクリーさんは言います、「ただ座り込みをしているだけじゃ、政府は何もし



てくれない。体を張ってニュースになることで、やっともう一步踏み出せるんだ。」と。

私は正直、旅で出会って人々のこんなにも真剣なまなざしに圧倒され、また衝撃を受けました。土地が奪われ、魚がいなくなるということは、彼らにとって死活問題なのです。また、第1村にいたおじいさんはこう話してくれました。「ダムができたことで魚が取れなくなっただけではない。今までの家族の暮らしや生活スタイルが変わってしまった。若人が都市に出稼ぎに行かなければならなくなり、家族がばらばらになってきている。」

私はタイでのツアーを終えた足で、岐阜の高山に向かいました。環境問題について考え活動する学生や社会人が集い、今問題となっている公共事業やゴミ、資源などについてお互いに情報を交換したり、勉強する合宿イベントがあったのです。それに参加し、自分が本当に贅沢だなと感じました。「資源が枯渇している、自然環境を守らなくては！」といいながらも、自分の生活は保障されているからです。どこか、自分の生活とはかけ離れたところに、自然の存在を感じます。自宅近くの川の水が汚れたところで、特に生活に困ることはありません。

今、タイで起きている一連の問題が、私たちの税金からできたものであるとすれば、こんなにも悲しいことはありません。本当に、誰のために税金を納めているのか怒りさえ感じます。環境問題にしても、国際協力にしても、まずは自分の生活を見直すことの必要性を、つくづく痛感します。

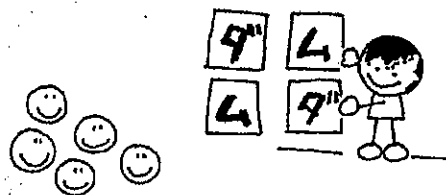
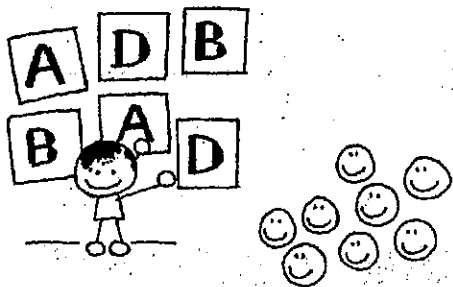
\*バクムン・ダムの問題はまだ解決していません。首相府前での住民の座り込みは今も続いています。

そして11月19日には、バクムン・ダムの反対住民の村の一つが焼き討ちにあい、重傷者を含む負傷者が出る流血の事態が起こりました。

詳細については、メコンウォッチのホームページ（アドレス下記）に最新情報が掲載されていますのでぜひご覧ください。

[http://www.path.ne.jp/~mekong-w/index\\_j.html](http://www.path.ne.jp/~mekong-w/index_j.html)

\*メコンウォッチ・・・メコン川流域・流域国に済む人々が開発の弊害を被ることなく、地域の自然環境とそこに根ざした生活様式の豊かさを享受できるように支援することを目指したNGO。現地の開発プロジェクトのモニタリング、調査研究、そして情報の活用という3点を活動の柱としている。



## メコンセミナー報告

神崎尚美

去る9月10日・11日東京で「自然は誰のものか」「開発」に脅かされるメコン河流域の自然資源と人々」と題された国際シンポジウムが開催された。これはメコンウォッチ、JVC、Oxfamから成るメコンシンポジウム実行委員会が開催したもので、当日は国内外から多くの参加があった。一日目は「開発の脅威と代案の提示」として、主にメコン流域の国々の農業の変化と土地の問題について報告があり、話し合われた。具体的内容は伝統農法から近代農法への移り変わりもたらした深刻な問題やそれぞれの取り組み、ネットワークの意味やキャンペーン活動の方法などであった。二日目は「メコン河開発と日本のODA」で、開発による様々な問題のケースを通して、これらの開発がいかに環境や住民への配慮を欠いたものかが具体的に報告された。それから開発を推し進める側（大蔵省、JBICやJICAなど）との議論がされた。

今、メコン河流域の国々は大型開発が推し進められている。開発の可能性の大きい、魅力的な地域ならしい。そこにはまた、多くのNGOが活動している。これらのNGOがネットワークを組むことによってより大きな力が生まれればいいと思う。

福岡でもこの流れを受け、福岡編「豊かな自然をこわすもの」としてセミナーを開催することができた。このセミナーで扱ったタイの「クロンダン」という地域は直接はメコン流域ではないが、ADBが出資をしていること、今年5月のADBのチェンマイ総会以降、住民やNGOが反対運動を繰り広げていることから、福岡ではあえてこの問題を取り上げた。内容は本紙にまとめてあるのでそちらを参照していただきたいが、この場を借りて福岡までわざわざ来て下さったゲストの方がた、そしてコーディネートして下さったメコンウォッチに心よりお礼を言いたい。

### メコンセミナー特別編 in 福岡「豊かな自然をこわすもの」報告

去る9月16日(土)、春日市クローバープラザで上記講演会が開催されました。同日午前にはゲストと共に福岡市の和白干潟を訪問、建設中の人工島により干潟の自然環境が変化しつつある様子を実感しました。

ゲストは、ウィトゥーンさん(タイ・TERRA)、ヌリナーさん(アメリカ・BIC)、マイケルさん、チャーリーさん(共にオーストラリア・CAA/オックスファム)の4人。今回のテーマはタイ・サムットプラカン県クロンダン区に建設中の汚水処理場による環境破壊でした。

ウィトゥーンさんからはクロンダン区の良い漁業環境が破壊される懸念と、このプロジェクトの不透明性について。ヌリナーさんからは融資しているADBのポリシーに違反する点がいくつかあるということ(環境影響評価が行われていないなど)。チャーリーさんからはタイと同様に日本でも和白のような問題があり、オーストラリアにも問題があるのだから、各国の活動団体が手を組むべきだということ。マイケルさんからは一般市民にはどのように呼びかけて理解し、協力してもらおうかということをお話していただきました。

意見交換も行いましたが、それぞれの貴重なご意見をお聞きするのに時間が足りなかったのが残念でした。

(講演に興味をお持ちの方は、講演内容をテープ起こししたものがありますのでご連絡ください。)

(楠原圭子)

## 福岡蔵相会合、どうしよう会合の残したもの

寺嶋 悠

ミレニアムだなんだと世界中が浮かれ立った2000年も、気が付けば残り1ヶ月。

「G7九州・沖縄サミット」がドタバタと慌ただしく通り過ぎて4ヶ月になる。連日連夜の過剰報道、チャンネルひねればどこもサミット、紙面を開けばモリさんの顔ばかり。この国にとって、沖縄サミットは一世代の超・ビッグ企画だったようだ。

毎年サミットと共に開かれる各国蔵相、外相による国際会議のうち、蔵相会合が開催されたのがここ福岡市だった。

FNAのメンバーにとっては、福岡蔵相会合は自然と97年のADB福岡総会とダブってくる。3年前、ADB福岡総会へ自由な市民の立場から意見を言いたい、という思いからFNAが発足した経緯があるからだ。福岡市にとって、大きな国際会議はADB福岡総会以来のこと。哀しいかな、こういった国際的行事の際、受け入れ地域は歓迎行事や関連イベントの準備に追われがちである。

この福岡蔵相会合が市民の頭の上を素通りしていくのを、みすみす逃すことのできない奇特な？人たちがいた。それが、ADB福岡NGOフォーラム（以下FNA）、ジュビリー2000福岡、写真の会パトローネ、福岡ゼネラルユニオンほか、地元有志たちによる「福岡どうしよう会合」だった。

今年2月のこと。これまでの国際会議やオリンピック、博覧会のように、おそらく今年7月の福岡蔵相会合でも、町中にイベントのロゴマークと「〇〇社は沖縄サミットを応援しています！」（それにしても飲料会社やティッシュ会社がサミットを応援することに、どんな意味があるんだろうか？）の文字が踊り、地元デパートの軒にはロゴマークの旗が舞うことになるのでは・・・そういった危機感めいた予感を感じた私たちは（そしてこれは的中した）、有志や関係者に声をかけ合い、ひとまず「サミットへ向けて自由な市民の立場から関わっていこうというNGO・個人による連絡調整会議（仮）」を持つことになった。

2月7日。第一回の会議参加者はおよそ20名。年齢層は広く、ODA、途上国の累積債務、沖縄基地問題、労働者とグローバリゼーション、国際政治、NGOなど、興味分野も多岐に渡っていた。それぞれがそれぞれの立場から、蔵相会合開催をただのイベントにしたいという思いを胸に秘め、なにかしたいという思いに燃える人たちだった。「蔵相会合があるけど、どうしよう？」という誰かのシャレにより、このフシギな集まりは、「サミットNGO連絡会福岡どうしよう会合」と名付けられた。

どうしよう会合は、組織の未熟さと活動への不慣れさをバネに、逆に柔軟さと間口の広さを持ち前の武器に変え、その後9ヶ月に及ぶさまざまな取り組みを行うこととなった。わたしたちのねらいは、蔵相会合やサミットで議論される内容にまで意識を向け、市民としてきちんと見つめること、そしてサミットを意識した各団体の取り組みを互いにリンクさせることにより、さらに効果的な働きかけを行うことだった。福岡を歩いての債務帳消しアピール、ウガンダからの債務報告会、開発援助を考える合宿勉強会、沖縄基地建設反対福岡集会、各団体合同の展示とアピール「シチズン・

サミット」、WTO（世界貿易機関）についての勉強会・講演会など、3月以降毎週のように関連する催し物が企画された。

中でも5月29日にFNAが主催したNGO大蔵省協議会は、蔵相会合前に開催地域の市民主体で開いた協議会として各地の関係者から高い評価を受けたものだった。残念ながら、ここで引き出した答えの中心的なものとなる「最貧国の債務帳消し問題を蔵相会合で議題として扱う」という点については、7月8日の蔵相会合後、世界中から期待されたほどの革新的な取り組みには敢えて踏み込まなかったことが分かり、NGO・市民としては肩すかしをくらったような感じとなった。そのため、この時福岡で発言した大蔵省官僚は、後に関係者から強い不満と不信感を買うこととなった。

しかし、これまで東京でしか開催されていなかったこういったNGO・市民と大蔵省との協議会が、初めて地方で開催されたことにはさまざまな意義がある。FNAのように、いわゆる「現場支援型」でなく、ADBをめぐるさまざまな問題の啓発や、日本国内の関連機関への政策提言に地道に取り組んでいる市民団体は、まだまだ日本には数少なく、そのため活動への理解も薄いのが現状だ。NGO大蔵省協議会のような、政策提言活動は、東京以外の地域でもNGO・市民運動の活動の一つになりうると示すことは、今後、福岡のNGO・市民団体の活動分野を広げ、自分たちの能力を強化していくことへも確実に繋がっていくだろう。

7月8日福岡蔵相会合当日、どうしよう会合関連イベントのラストを飾ったのは、「G7蔵相にメッセージを届けよう！フラワーマーチング in 福岡～債務のない公正な21世紀を！～」だった。このマーチングへは、「花～すべての人の心に花を～」で知られる沖縄の喜納昌吉さんや南アフリカ、東京、関西、九州各地から150人が駆けつけた。重債務貧困国の債務帳消しはもちろん、米軍基地建設反対、平和への願い、労働者による反グローバリゼーションの声、女性と子どもの権利、野宿労働者の権利など、公正な21世紀を求めている合同のアクションとなった。この蔵相会合への市民側からのカウンターアクションは、ロイター・FP・時事・共同各通信社や各新聞社・テレビ局を通じ、何も決めきれなかった福岡蔵相会合の結果と対照的に世界中に報道されることとなった。

市民の声を、福岡から世界へ。

わずか9ヶ月の間だったが、最初は何ができるだろうかの模索からのスタートだった。どうしよう会合の取り組みは、確かなものをここ福岡の地に残してくれた。この経験とつながりは、FNAの活動においてもまた、2001年以降さまざまな方向へ広がる可能性を秘めている。

（\*寺嶋悠さんはFNAでの活動と共に、ジュビリー福岡のメンバーとしても活躍されています。）



どうしよう会合の活動

バンコックに着いて、2 週間ばかりがたちました。2 度目ですが、1 度目は大昔で短期間の旅行でしたので、ほとんど初めてと言っていいくらい。高層ビルの林立、車の激しい交通量、近代的なショッピングセンター、スカイトレインと称されている都市高速鉄道など、ここ 20 年ばかりの高度成長の跡がうかがえる反面、大気汚染など環境悪化も著しい。

しかし、人々の暮らしや町のあり方など変わらない光景も、非常に懐かしいというか、心温まる思いがします。実際に、これまでラテンアメリカを主に見てきた者の目には、ここには、メキシコなどにはない、人間の昔からの暮らしの匂いがぶんぶんとする濃密な人間くさい空間があり、この猥雑さこそ、まさに自分の子供時代の日本の原風景というか、心の故郷という感じさえするくらいです。タイ語が一言もできなくて、英語とジェスチャーと日本語ですましていうのに（日常会話には苦勞しないメキシコよりも）、奇妙に心が落ち着くタイでの生活です。米がベースになっている食べ物にも（唐辛子で非常に辛いのはメキシコと似ているけれども）、ほとんど違和感がなく、タイは、日本人にとって、本当に暮らしやすいところですね。

タイに来て最も印象的なことは、ここでは、NGO や住民運動など、草の根の大衆運動が実に生き生きと活発なこと（権力に飼いならされている日本とはまったく違って、権力に対峙する大衆の躍動感があります）。ここ数日のバンコックポストという代表的な英字紙の 1 面トップを賑わしているのは、タイ南部のタイ湾での海底天然ガス田から、タイとマレーシアにガスを供給するタイ・マレーシアガスパイプライン計画を巡る漁民の反対運動です。公聴会反対デモに参加した住民の帰路のトラックに何者かが発砲したのを激高した住民が警察署に押しかけてあわや建物に放火しようかというところで、警察と話がまとまり、1 週間かそこら後に警察が容疑者を逮捕して、警察署に押しかけた住民が歓呼しているとかといった経緯が事細かに写真入りで 1 面トップで連日報道されたり、NGO サイドの理論家ペロー教授の IMF/世銀を問う批判論文が『分析と意見』という評論ページに大々的に載っていたりします。同僚教授に聞くと、今、タイでは、NGO 活動家は大変な人気を博していて、上院議員に当選するものが何人も居るとか。先のガスパイプライン計画に ADB が関わっているかどうかはわかりませんが（多分、タイ政府資金だと思えば彼は言っていた）が、パクムンにせよ、サムットプラカンにせよ、強力な住民運動が存在し、それが社会的に広く支援されていることだけは、私のような短期滞在者にも十分察知できます。

教育改革や選挙法改革やいろいろな国内の動きがある（当然それに対応して民衆の側の反応がある）ようですが、私には、詳細はわからないので、割愛することにします。大学の方は、順調です。チュラロンコン（タイの東大といわれている）は、大きなキャンパスで、西南どころか、九大よりも広い位。市民は誰でも入って来れて、毎週金曜日には屋台が出て、まるで街中のような光景を呈します。学生たちは、制服で、白いシャツと黒いズボンないしスカート（ミニまたはロング）で可愛いものです。私の研究環境も思ったよりよくて、安心しました。研究室は、西南のと比べて 3 分の 1 位の広さで、机と電話以外に何もありませんが、持ってきたパソコンにつなげますし（実際には、持ち歩くのが重いので、自宅に置いたままで）、教員の共同パソコン室に行くことが多い

のですが（8 台位あるのでたいてい数台は空いている）、隣の建物には、親しい教授が所長をしている中国研究センターがあり、その隣の建物には、先のペロー教授が所長をしている有名な NGO 研究調査機関である Focus on the Global South（先に Jubilee South の国際会議を主催した団体で、それにジュビリー福岡を代表して出席された土井さんの話では、やはりペローの講演はぬきんでいたとのことです）が入っている社会研究所があります。ペロー教授は忙しい人で、世界中を飛び回っており、ここを留守にしていることが多いのですが、先日ちょっと立ち話をする機会がありました。彼が旅行から帰ってきたら、今度はゆっくり話をしようということになっています。政治学部の建物も比較的近くです。私は、今のところは、持参した本や資料を読んでいる段階で、まだ研究が本格的には軌道に乗っていないせいか、図書館には、新聞を読みに行く程度ですが、資料的にはさほどのことはなさそうです。最近では、インターネットでたいてい間に合いますからね。

生活の方は、大いにエンジョイしています。大学まで歩いて 15 分ですし、交通（スカイトレインの駅まで数分）にしても、買物（ショッピングセンターまで数分）にしても、まったく便利極まりなく、アパート（ホテル兼用）は、朝食つきで、プールも、サウナもあり、毎日メイドサービスもついていて、快適に暮らしています。ここに住んでいるのは、単身のビジネスマンが多いようです。近くに（歩いて 25 分くらいのところに）テニスコートを見つけましたので、日曜日には、二人でテニスをして、その後、アパートのプールとサウナに入っています。フィットネスセンターもあって、アメリカ人などは利用しているようですが、私たちはほとんど使っていません。物価の安いことは、アジア危機でパーツが下落したこともあり、日本人の目から見ると、驚異的です。統計的には（ジニ係数）、タイは所得格差の高い国ですが、乞食の数は圧倒的に少ないし、人々の服装その他から見ても、メキシコよりずっと良いように思われます。大学の食堂は、教職員用も、学生用も、ほとんど 15 バーツ（1 バーツ = 2.5 円位）ですみます。ご飯に肉と野菜をかけただけのものですが。テニスコートも、1 面、1 時間、たったの 100 バーツです。しかし、タイ人にとっては、生活は大変です。バンコクの最低賃金は、1 日 8 時間労働で、160 バーツとのこと。日本の時給より低いでしょう。平均的労働者の平均月収は、算出が難しいですが、たとえば、タクシ一運転手の月収は、6,000 から 7,000 バーツくらいと同僚教授が言っていましたから、やはり、これくらいの物価でも、タイ人民衆にとっては、安いものではありません。タイ式マッサージにも二人でよく行っています。先日の 3 連休には、サムイ島へ行って、象に 1 時間乗った上に、サル「労働」（ココナツの木をスルスルと登って、熟れていそうなココナツを手でひねって上手に落とす）の見物し、スクーバで潜ってきました。雨季が来ているとのことで、透視度も悪く、魚の種類も、大物が出なくて、もうひとつでしたが。年に一度くらいしか潜らないので、技術の方は、いつまでたっても、中級レベルには行かないようです。

妻は、風邪が直って（冷房で風邪を引く）、ようやく元気になってきました。タイ語とパソコンの勉強といろいろな情報収集と遊びに忙しくしています。

それでは、今日はこれで失礼します。

11月1日 バンコックにて 吾郷健二

## びおふえすた初参加

西山優子

初めて参加したびおふえすた。天気のことや人手不足のことなど心配に思う事もあったが、いざ始まってみるとバタバタと忙しいながらも順調に進んでいったというのが私の印象である。ADB の出し物は昨年的好评により連続出店のタイカレー、日本カレー、そして白玉団子、缶ジュースだ。西高宮小学校の家庭科室での準備段階から、カレー(特にタイカレー)はすごい自己主張をしており、“これは一度嗅いだ人を引き付けて離さないぞ”、そんな予感をさせるものがあった。予感中(?)タイ・日本カレー共に待ち人が出るくらいの人気であった。白玉団子も小学生達に人気があり、ライバル視されていた他団体のゴマ団子に優る好評ぶりでもなく売り切れてしまった。

舞台では沢山の催し物があったのだが、ADB のブースはちょうど舞台と同じ並びにあったためによく見る事が出来なかった。しかし、マジックショー、胡弓の演奏、バンドのライブその他で驚いたり、感動したりという観客や、舞台の裏で音声や機械の作業をしている人たちを見て私も感動したり、楽しむ事が出来た。

びおふえすたにはたくさんの NGO、NPO の団体が出店してそれぞれの団体が自分達の活動を紹介する形になっているのだが、外部からのお客さんが少なかったように感じた。小学校で開かれるというでもっと地域の方や、NGO・NPO に関心のある方達が押し寄せてくるのかと想像していた。このことをそのまま地域の人たちの関心度としてみるのはあまりにも短絡的すぎる事だが、NGO・NPO 活動をいかにもっと人々に浸透させていくのかという事を身を持って感じる事が出来た。だが、びおふえすたもまだ 3 回目である。このお祭りが今後ずっと続いてこの時期になると“びおふえすたに行かなくちゃ!!”と思う人がたくさんたくさん出てくることを祈りつつ、そしてお手伝いに来てくださった方達に感謝しつつ帰宅の途についた。

\*びおふえすた 2000 は、10 月 29 日・西高宮小学校グラウンドで行われました。前日の雨のため開催が危ぶまれましたが、朝まで雨が残ったものの、開始時刻 10 時にはなんとか上がりオープニングとなりました。びおとーぶを事務所としている 4 団体の他、19 のグループが参加し、展示やバザー、屋台などを出店しました。今回は福岡市広報課のテレビ取材も入り、後日放送されました(ほんの 5 分でしたが)。





## 活動報告・これからの企画

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ 活動報告 ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

- 8月28日 講演「クジラの水銀汚染」 講師：倉澤七生さん  
9月1・2日 ESCAP環境大臣会議（北九州市）  
9月3日 アジア・太平洋環境女性会議（北九州市）  
9月4日 FNA運営委員会  
9月16日 メコンセミナー特別編 in 福岡 「豊かな自然をこわすもの」 クローバープラザ  
10月6日 FNA運営委員会  
10月29日 びおふえすた2000  
11月10日 FNA運営委員会  
11月21日 FNA運営委員会  
11月25・26日 あすばるフェスタ  
12月8日 開発と環境セミナー「タイ・NGOと現地住民からの報告」 アクロス福岡

♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ これからの企画 ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪ ♪

- 12月11日 FNA運営委員会  
12月27日 びおとーぶ忘年会

2001年

- 1月20・21日 WTOを問うNGO福岡会議

☆☆☆ おしらせ ☆☆☆

FNAのニュースレター・オープンアカウントにあなたのご意見を掲載しませんか？

疑問・質問・感想などなんでも結構です。原稿をお待ちしています。

催しのお知らせも歓迎。次号の発行予定は2001年2月です。

お問い合わせは

ADB 福岡NGO フォーラム (FNA) へ

〒815-0071 福岡市南区平和1-6-1 福岡NPO共同事務所「びおとーぶ」内

TEL&FAX 092-526-9620 e-mail biochan@lily.ocn.ne.jp

## 住民参加・情報公開

## 情報公開

情報公開政策の策定後、ADBの業務に関する情報の公開は、より体系化し、状況が改善したことは事実である。例えば、NGOのメーリングリストが作成され、広報室や地域事務所／代表事務所を通じて情報が提供されるようになった。また、委託図書館制度により、地域事務所や代表事務所がない都市でも、基本的な情報へのアクセスが可能となっている。インターネットを通じた情報提供も行われており、その内容も改善されつつある。個別のプロジェクトに関する資料で、通常は有料のものもNGOに対しては、無料で提供される。今後具体的にいかなる形で進められるか注視する必要があるが、関連資料を現地語に翻訳するプログラムも進められている。しかし、以下のように改善されるべき点も多く見られることも事実である。

1) 情報が提供されるタイミング 特に、プロジェクト関係の資料は、理事会審議を経た後、公開されるのが通常となっている。受益者にとって本当に意味で役立つ情報は、(たとえ承認される前の段階で、様々な機会が設けられているとされているものの) 実際には制限されている。

2) 公開の対象になるものとならないものの分類 政策上の規定により、「機密扱い」や「内部扱い」とされる資料も多く、全く公開されない資料もある。現実上の制約を考えた結果、一部の資料の公開が制限されてしまうとしても、その分類方法に未だ改善の余地があるとも言える。例えば、理事会での討議事項に関する情報などは、各国が意思決定を行う過程で、より適切な判断を下す為に、外部の人間の意見が集約されることが望まれることから、公開の対象となるべきである。

3) 民間部門業務の公開性 民間部門業務、特にプロジェクトの関係資料は、「商業上の利益を損なう恐れがある」として、公的部門のそれと比べ、資料の公開が制限される。法的問題を熟慮する必要があるかもしれないが、現状が改善される余地もあるはずである。

4) 制度と実際の運用上のギャップ 例えば、地域事務所／代表事務所には、NGO担当官が置かれ、その国での情報公開を司ることになっているが、実際には事務所によっては必要な資料が提供されないなどという問題もある。委託図書館制度に関しても、現在すべての加盟国にある訳ではないし、中には資料の入手が困難で、実際に機能していない所もある。

すでに述べたように、結局の所、住民参加や情報公開に関して共通して言えることは、「器があっても中身が十分に満たされていない」ということが根本的な問題であると言える。つい最近まで、器がなかったことを考えれば、器が出来たこと自体、評価に値することかもしれないが、むしろ重要なのは今後それらをいかに満たして行くかということである。この点では、NGO側も今後具体的な提言を通じて、考慮してゆく必要がある。

## 環境・社会政策の内容とその実行性

93年以降、ADBは環境・社会開発に関連する様々なセクター政策を策定・改訂した。その中には、人口／情報公開／森林／エネルギー／農業・天然資源管理／非自発的移住／漁業／性別／先住民族／NGOとの協力／腐敗防止／水資源開発・管理などがある。こうした政策の策定にあたっては過去にNGOがADBに対し求めたことでもあり、その過程で多くの意見を述べるに至った。すでに説明したように、各政策の内容に関しては、NGOの意見が充分反映されたとは言えず、未だ改善の必要性が見受けられるものの、実際に政策が作られたこと自体

は一定の評価を与えることが出来る。しかし、問題は（すでに何度も述べてきたことであるが）それらが実際の運用過程でいかに反映されるかということである。

例えば、非自発的移住に関しては、「強制移住は可能な限り避けられるべきであり、それが不可避であれば、対象者の生活が移住する以前の生活水準と同等あるいはそれ以上に保持されるよう、補償がなされるべきである。」という点が ADB の基本的な姿勢と言える。移住問題は、大規模プロジェクトが行われる場合、最も注視される問題の一つであるが、ここでポイントとなるのは、補償の行い方／対象者の選定の在り方／その後の監視システムの是非などである。例えば、農民に対しては、移転後の職業を補償するという観点から、金銭補償だけではなく、耕作可能な代替地を提供されなければ意味がない。ダム建設の場合などは、補償の対象を下流域で生活する人達も対象に入れる必要も出てくる。また、補償がなされた後も、本当に生活水準が以前と同等に保たれているのかどうか長期的に監視する必要もある。先住民問題に関しては、各国・地域ごとに状況が異なる中で、今後援助プログラムの策定や個別のプロジェクトを実施する際、具体的にどのような枠組みで対応してゆくかということが重要である。森林／漁業／農業／エネルギー政策に関しては、持続可能な開発という観点、例えばエネルギー分野では代替エネルギーの開発、農業では持続可能な農業管理（輸出志向の単一作物栽培のみに異存しない）などが政策に盛り込まれてはいるものの、実際にそれらを目的としたプロジェクトへの支援が積極的に行われているとは言えず、政策の内容と運用面でのギャップが見られる。この点では、気候変動問題に関する実際の取り組みという点でも同様のことが言える。NGO との協力に関しては、政策の中で提案されていることが具体的に実施されてゆく過程が今後注目される注視される。

#### 50:50 Mix のトリック

ADB は毎年改訂される「中期戦略枠組み」の中で、環境・社会に関連する業務を重視するとし、年間投融资の 50:50 比（最低プロジェクト総数の 50%、総額の 40%を環境・社会関連のものとする。但し、公的部門プロジェクトのみ。）を実施し、それをもって ADB が環境・社会に配慮している明白な「証拠」として、内外に示している。しかし、この 50:50 比にはトリックがある。まず、ADB によるすべての公的部門プロジェクトは、1) 経済成長型、2) 社会開発、3) 環境、4) 社会開発・環境を第二目的とする成長型、の 4 つに分類される。環境・社会に関連するプロジェクトが行われること自体は、評価されるものの、いちがいに ADB が 50:50 比を実施しているから、環境・社会に充分配慮していると言い切ることが出来ない。特に、プロジェクトの分類のされ方自体、出来るだけ多くのプロジェクトを環境・社会プロジェクトと見なしてしまう傾向もあり、例えば、前記 4 番目の「社会開発・環境を第二目的とする成長型」プロジェクトは、実際にはインフラ建設が主要な目的とされていても、50:50 比に当てはめられる際、条件を満たせば環境・社会開発プロジェクトと見なされてしまう。つまり、極端な言い方をすれば、50:50 比は「数合わせ」に過ぎないとも考えることも可能であり、統計上の結果をもってすべてを判断することは出来ないということである。当然、プロジェクトの分類方法や 50:50 比の在り方に関し、再評価される必要があるが、ADB が真の意味で環境・社会関連業務の重要性を認識しているのであれば、複雑な「数合わせ」ではなく、もっと踏み込んだ形で、例えば貧困削減を目的とした ADF の財源のすべてを環境・社会に関連するプロジェクトの支援に限定するなどの措置が取られるべきである。特に、ADF の財源はその殆どが加盟国からの拠出金が占る「純粋な公的資金」であるのにも関わらず、現在もその多くが大規模インフラ開発プロジェクトへ向けられており、その活用方法が再考されても良い。また、環境・社会面への支援に限定するという形で、別途新たな基金を設けることも考慮される余地がある。（次号へ続く）

## 考える糧～Food for Thought

### その4：並べて考える

---土井 利幸 (どい・としゆき)

よく似た二つの言葉を並べると、パッと目の前が開けることがある。ある詩人は、井伏鱒二の『黒い雨』から「わしらは、国家のない国に生まれたかったのう」という無名兵士のつぶやきを引いて、「国家」と「国」（「邦」または「クニ」）を対比してみせた。「国」を守ることは大切だ。しかし、「国家」から利益を得ている者たちは、「国」と「国家」の区別をあいまいにして、私たちに「国家」を守らせようとする。

最首悟（さいしゆ・さとる）という人は、「『学問』ではなく『問学』だ」と言ったのだそうだ。既成の「学」をそのまま受け継ぐのではなく、むしろそれを問うことこそが大切なのだ。

「国語」は単一民族幻想の維持装置であり外国人同化のためのツールであるが、「日本語」という言葉の響きには、多民族の相互理解のための手段となる可能性が少しは感じられる。

よく似た言葉を並べることで、それらの言葉が持つ意味の差異を際立たせるのは、言語学者が未知の言語を調査する時の手法である。「考える」とは、既知のものを未知のものとして捉え直す行為でもあるから、この手法を自分の母語に応用してもよいわけである。

## ADB 福岡 NGO フォーラム入会のご案内

ADB福岡NGOフォーラムでは会員を募集しています。入会されますと、活動報告などを掲載したニュースレターをお送りします。

年会費は1口3000円です（入会金は不要です）。入会される方の氏名・住所・連絡先（電話・ファクス・Eメールアドレス）を当フォーラムへお知らせください。会費は、現金書留で送付するか、または、次の口座へ振込をお願いします。

西日本銀行 天神北支店

ADB福岡NGOフォーラム 楠原圭子 普通 口座番号 0369343

詳細は、福岡NPO共同事務所「びおとーぶ」内 ADB福岡NGOフォーラム

(〒815-0071 福岡市南区平和1-6-1 電話・ファクス：092-526-9620

e-mail:biochan@lily.ocn.ne.jp) へお問い合わせください。

### Open Account とは

英語の「アカウント」には、「銀行口座」と「説明」という二つの意味があります。「説明」の意味の「アカウント」は、最近よく聞かれる「アカウントビリティ」(説明責任)という用語の一部でもあります。「オープン・アカウント」とは、ADBが銀行であることから「口座を開く」という意味と、「ADBの活動を市民に対して分かりやすく説明し、情報の公開を求めていく」という意味がこめられている「かけ言葉」です。『オープン・アカウント』がADBなどの国際金融機関やODAの透明性を高める場になることを願ってやみません。

### Open Account 2000年12月号 Vol.6

発行：ADB福岡NGOフォーラム

住所 〒815-0071 福岡市南区平和1-6-1

福岡NPO共同事務所「びおとーぶ」内

TEL&FAX 092-526-9620

編集責任者：楠原圭子

e-mail biochan@lily.ocn.ne.jp

ホームページ開設！

<http://www.geocities.co.jp/>

WallStreet/2253